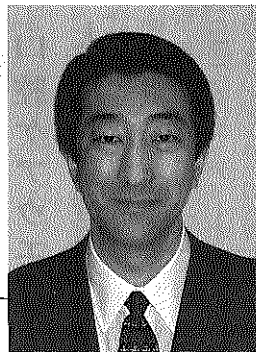


前回は、今後の医療の中で重要な位置を占めるであろう動脈硬化性疾患について述べた。今回は同じく働き盛りの生産者を襲う「癌」をテーマにしてみたと思う。

漢方と癌は結びつかないと思われるかもしれないが、実際には多くの癌患者さんを診療している。癌の診断が下った段階から緩和ケアの段階まで、臨床的には幅広い。実際にどの段階においても漢方薬は有用であるが、特に化学療法、放射線療法の副作用を軽減する目的でよく用いられる。中には、「化学療法がいやだから漢方だけでどうにかしてくれ」という虫のいい患者さんもあるが、基本的には漢方単独で癌をやっつけることは不可能と考えている。西洋医学的にやるべきことをやった上で、漢方を加えると効果が高い。過剰な期待を寄せざる患者さんには「漢方は脇役にはなれても主役にはなれない」と説明させていた

だいている。脇役ながら時に主役の

慶應大学医学部助教授



渡辺 賢治

漢方シリーズ

⑫

癌対策における漢方医学の役割

治療を全うするために重要な役割を演じる深い役者である。例えば十全大補湯にはシスプラチンによる腎障害、骨髄障害を抑制する働きがある。

十全大補湯の腎毒性軽減機序は、成分のリンゴ酸ナトリウムの錯体形成によるものである。同時に

に肝障害も抑制する。なおかつ、シスプラチンの抗癌効果を抑制しない、というのがミンである。

例えばフロセミドで利尿を図れば腎毒性は軽減するが、同時に抗腫瘍効果も減弱する。

では、リンゴ酸にそれほどの効果があるのであれば、シスプラチンとの合剤を作れば良い、と思われるかもしれない。しかしながら、リンゴ酸には骨髄毒性軽減作用がないのである。十全大補湯の骨髄毒性抑制作用は他の成分による。すなわち複数の成分が複数のタ

時には成分同士の間で相乗効果・相殺効果が作用発現に重要な時もある。これこそ複合成分を有する漢方薬ならではの真骨頂である。

塩酸イリノテカンも抗癌剤として幅広く用いられている。副作用としては重篤な下痢がある。これは塩酸イリノテカンの活性体がグルクロン酸抱合を受けて胆汁経路で腸管に排泄された後、腸内細菌のグルクロニダーゼ

化を抑制する。そのほか、漢方で免疫を上げて再発・転移を予防したいという要望も多い。しかしながら、一般的に再発・転移予防の研究は長期間の観察が必要であり、すぐに結果が出ない。代理メーカーが長期間の研究プロジェクトが必要となる。

によって脱抱合を受け、再び活性体となるためである。半夏瀉心湯にはグルクロン酸抱合体が多く存在し、競合阻害することでイリノテカンの再活性

合を受け、再び活性体となるためである。半夏瀉心湯にはグルクロン酸抱合体が多く存在し、競合阻害することでイリノテカンの再活性

昨年、がん対策基本法が成立し、それを受けて各省庁が動き出した。厚生労働省でも文部科学省でも力を入れて、新しいプログラムが立ち上がっている。そうした中で、やんわりと体に優しく効く漢方の重要性が明らかになり、医療の中でその役割を発揮できることを願っている。